

ポスター発表 3

「新華僑」である親は子どものことばの学びをどのように捉えているか

葛 茜 (中国福州大学外国語学院/京都大学外国人共同研究者
博報財団「国際日本研究フェローシップ」招聘研究者)

研究の目的と意義:

在日「新華僑」とは、1980年代以後中国の「改革開放」を機に日本に渡ってきた中国人である。彼らは中国語、中国の伝統文化の存続を重視しながらも、「老華僑」と比べ国籍や移住地、生活スタイルなどの面において、柔軟に選択し対応する傾向がある。また、近年中国の経済発展に伴い、長期、短期に中国に帰還したり、環境問題や教育問題で日本に再移住したりする新華僑とその子弟が拡大している。つまり、日本で定住するほかに、中国に帰還する、あるいは日本に再移住するといった新たなドランスナショナルな移動が生じている。当然「新華僑」の子どもの教育は、これらの移動、帰還体験によって、従来の教育の枠に収まることなく、新たな対応や支援体制が求められている。本研究は、「新華僑」である親はどんな理由でどんな移動を選択しているのか、移動に伴う子どもの教育をどのように認識しているのかを、ことばの学びの捉え方から調査・考察したものである。国際移動が加速している今日、本研究は複数の言語・文化間で越境する子どもの日本語教育に新たな視点を提供することをめざす。

研究方法:

三人の「新華僑」である親を対象に、半構造化インタビューを行って分析、考察した。

研究結果と考察:

調査の結果、次のことがわかった。

- ① 「新華僑」である親は子どものことばの学びを、日本社会に溶け込み、定住するために必要とする最低限の道具だけではなく、子どもの将来図に結びつくための一種の「言語の投資」だと認識している。この言語の投資は、日本語、中国語のみではなく、英語も視野に入れられている。
- ② 「新華僑」である親は子どもを、複数の言語と文化の間を行き来することができる「中国人」になることを期待している。しかし、現実ではさまざまな問題に直面し、親も子どもも言語と文化、母国と他国のはざままで不安や葛藤を抱えている。